類（pseudofungi）であること強く示唆している．しかし，他の生物群との系統進化的関係は，なぞの部分が多い．

本書は，3つの部分より構成されている．第1部は，総論に当たるもので，「変形菌とは」というタイトルのもとで，ライフサイクルと生態を中心に変形菌類の生物学的特性について解説している．第2部（図と解説）は，本書の中心部分で，日本に生息する変形菌類の普通種，134種8変種の形態的特徴，類似種との区別点，検索表などを記載している．ここでの図は，すべてカラー写真である．第3部は，用語解説，方法・技術，参考文献，変形菌綱 Myxomycetes の分類表，用語対照表，学名，和名索引に当てられ，本書が専門図鑑としてのみならず初心者のマニュアルないしはハンドブックとしても機能するよう配慮されている．

本書に一つ注文をつけるとすれば，学名の和名の点である．種を含むほとんど全ての分類群に和名がついている．例えば，Stemonitidaceae はムラサキホコリ科，*Fuligo candida* はシロススホコリ．接尾語の“カビ”が“真の”菌類（カビ）と区別するために意図的に省いてある．和名には，従来通り接尾語として“カビ”を付けた方が日本語として落ち着きがある．

服部広太郎著「那須産変形菌類図説」(1935年)，江本義数著「大日本植物誌　No. 8　変形菌類」(1942年) などのモノグラフはすでに絶版になっている今日，本書は，変形菌類（粘菌類）に関心をもつ人々にとって待望の1冊であり，日本語による日本産変形菌類の手ごろな専門図鑑として，ハンドブックとして重宝がられるに違いない．「図と解説」の図（カラー写真）は，この“ルーペの世界”の生物の姿（外部形態）をみごとに映し出し，本書を魅惑的なものにしている．これらの写真を眺めているだけでも，実に楽しい．

（杉山純多）

□館林市教育委員会: **館林市の植物** 195 pp. 1995. 同委員会. ¥1,600（送料別）.

群馬県館林出身の松澤篤郎，島野好次，青木雅夫の三氏による，永年の調査研究の集大成である．関東平野の中央部，利根川と渡良瀬川にはさまれて池や水湿地の多いこの地域は，絶滅したがムジナモの産地として知られている．教育委員会の文化財調査の一環として刊行された本書は，したがって環境保全や教材として配置された見出しが多い．水辺・低湿地，耕作地，住宅地，林と分けて，それぞれの植物の特色が述べられている．また有用植物，名勝・天然記念物，巨樹・名木，植物観察コースの見出しで，観察に有用な情報が提供されている．類似植物の見分け方も，野外で役立つだろう．植物目録には38頁にわたって1121種類が記録されているが，内180種類が帰化植物，絶滅種・絶滅危惧種は139種類におよぶという．これらは特筆される植物という見出しで詳細に記述されている．ただ植物目録でもそうだが，採集・観察された日時が例外的にしか記録されていないのはもったいない．植物の変遷をたどるには，時刻の記録が必要だからである．植物目録は他の頁より文字が小さくなっているが，目録は最も基本的なデータなので，文字は小さくてもよいから項目は贅沢にとって欲しかった．予算の関係もあるだろうが，教育委員会としての姿勢の問題であろう．もう一つは参考文献の項に，研究小史に出てくる先覚者の業績が示されていないことが気になった．こういう古い文献はその表題の意図とは別に，なんでもない植物の変遷が無意識に記録されている可能性があるという点でも，人目につくようにしておいて欲しい．今後の参考までに記す．申込み先は〒374 館林市城町 3-1　館林市文化会館内，館林市教育委員会文化振興課．

（金井弘夫）

□近田文弘・清水建美：**中国天山の植物**　228 pp. 1996. トンボ出版. ¥25,000（送料は当分の間サービス）.

中国の奥地も，いまや秘境ではなくなりつつある．新しい地域の調査が始まるとき，まずその地を踏んだ人の見聞をみんなが知りたがる．植物に興味がある人間なら，植物や景観の写真が，たくさんの情報を与えてくれる．かつてヒマラヤの植物調査が始まった頃，「シッキムヒマラヤの植物」や「東部ヒマラヤの植物写真集」が，多くの人の関心をそそったということを，近頃になって思い

がけない分野の人の口から聞かされることがある．本書もそういう類の本で，過去七年間の開拓的調査の一端を披露したものである．個人の旅行とは異なる正式の科学調査を，政治情勢の微妙な地域で行うむづかしさ，それを乗り越えようとするさまざまな努力は，まえがきやあとがきに僅かにうかがえるだけである．こういう本を作ったこと自体もその努力の一つの表れで，この本を足場にしてさらに調査活動の拡大が計られるのだろう．昔とちがって写真や印刷の精度が格段に向上しているし，植物学的予備知識も豊富になったので，たいそう見栄えのする本となっている．144頁までが撮影日付のついたカラー写真で，高山帯，亜高山帯，草原・耕地，砂漠とまとめられている．以後が解説で，生態や用途を含めてかなり詳細に記述されており，とくに薬用についてはくわしい．和名のない植物には学名の片仮名よみがすべてつけてあり，本書が植物研究者以外の一般読者も対象にしていることを物語っている．トンボ出版の住所は，〒543 大阪市天王寺区空堀町 8-16 (Tel. 06-768-2461) (金井弘夫)

□角野康郎・遊磨正秀：**エコロジーガイド・ウェットランドの自然** 198 pp. 1995. 保育社. ¥2,300.

自然環境保全の立場から，最近とくに水環境の重要さや湿原生態系の微妙なバランスが話題にのぼる．本書は動・植物生態学の研究者がその解説をめざしたものであるが，尾瀬や釧路のような特別な湿地だけでなく，水たまり，田圃の畦道やため池，川そのもの，さらに海岸のタイドプールまで，水とつながりの大きい環境についての理解を，一般の人々に深めてもらうことを目標にしている．全巻のおよそ半分の頁を，さまざまな水景観とそこに生活する生物の写真に割き，図鑑としてではなく，観察や理解の資料となるような文章で満たしている．見開き2頁が写真，次の2頁が読み切り解説となっているが，そういう工夫のわりには読みづらい．トピックにかかわらず字数が一定に制限されているためだろうか？知らない間に進んできた，海岸の護岸工事による環境多様性の喪失や，最近もてはやされている河川の「多自然型川つくり」への警鐘は，あらためて考えさせられるものがある．筆者の近所でもその例がみられるが，「自然型」という公園を造成したようなもので，予算が余ったので名目のよい仕事に使ってしまったような印象である．観察会や授業の参考に広くおすすめする． (金井弘夫)

□Kimura Y. and Leonov V. P. (ed.): **C. P. Thunberg's Drawings of Japanese Plants** 594 pp. 丸善. ¥66,950.

1988年ロシア科学アカデミー図書館（サンクト・ペテルブルグ）は，争乱に伴う火災により150万冊の蔵書を失った．その復興のための国際事業が進む中で，日本植物の図二束がみつかり，このことは事業に協力していた丸善に伝えられた．丸善は1990年木村陽二郎氏らを送り，これを調査したところ，この図はツュンベリーとシーボルト旧蔵の，未公表の資料であることが判明した．丸善は創業125周年記念事業の一環としてこれらを刊行することとし，まず1994年 "Siebold's Florilegium of Japanese Plants" を出版した．本書はそれに続くツュンベリー旧蔵の図と，それに係わる論説を含んでいる．

まず16頁にわたって，これらの資料に伴っていたマキシモウィッチのノートが示されており，彼の東亜植物研究にこの図が大いに活用されたことを示している．このノートを活字に組み直したものは，N. Zabinkova によって第二部に示されている．これに続いて305枚の植物図が原寸で記録されている．ちなみに本書のサイズは B4 である．ここまでが第一部をなす．第二部は論説で，木村陽二郎は本資料刊行のいきさつと，ツュンベリーの日本植物研究の業績を回顧する．W. T. Stearn は欧州の視点からそれを述べるとともに，日本の表記として Japonica と Iaponica が用いられているが，ツュンベリーは自分の文章には Iaponica と記したことはなく，J がラテン語では後発の文字であるため，とくにドイツの植字工は頭文字に J を使わず I を用いた結果であり，語法的にも誤りであるとしている．V. I. Grubov， M. E. Kirpicznikov は，マキシモウィッチが本資料をいかに研究に利用したかを述べる．T. A. Tchernaja は図のそれぞれについて描かれたいきさつを考察